

第四章

『魏志倭人伝』の信憑性

松浦縣マツラガタ

佐用姫サヨヒメの子が 領巾ヒレ振りし

山の名のみや 聞きつつをらむ

〔山上憶良(万葉集868)〕

「松浦国の佐用姫が肩にかけた布を振
つて夫を慕ったというこの山の名だけ
を聞いていることであろうか。

(任那へ赴任する夫を慕って石になっ
てしまった佐用姫の伝説で、松浦の山
に領巾サデヒコの嶺という名がつけられた。夫
の相伴サデヒコ手彦は朝鮮半島で活躍し、仏
教伝来にも功績のあった中央の武将だ
が、のちに高句麗の女性を妻にしたの
で、さらに佐用姫の伝説は人々の心を
うった)」

松浦川マツラガワ

玉島タマシマの浦に 若鮎ワカユ釣る

妹イモらを見らむ 人の羨トモしさ

〔万葉集863〕

「松浦川の玉島の浦で若鮎を釣る娘を
見ている人が羨ましいことだ」

四・一

又聞きの情報シンビョウセイ

『三国志』の著者、すなわち『魏志倭人伝』の著者の陳壽チンジュや、その元本『魏略』の著者魚豢ギョカンが参考にしたであろう史料がつぎの二つであることは、ように推察できる。

〈ア〉日本に派遣された使者の帰国報告の記録またはその伝聞。

〈イ〉日本からの使者が帯方郡や魏の都で述べた言葉の記録またはその伝聞。

◎魏国の使者は北九州までしか来ていない

まず〈ア〉について考えてみる。

この時代に倭国ワを訪問した魏キの使者としては、西暦二四〇年に訪れた梯儁テイシュンと、二四七年に訪れた張政チョウセイの名が、『魏志倭人伝』に残されているわけだが、この二人の訪日が本当だったとすると、その報告が皇帝の記録書などに残されていて、その書写を陳壽や魚豢が読んだか、あるいは伝聞で耳にしたかの可能性がある。

しかしこの二人の使者は、もし派遣されたのが本当だったとしても、『邪馬台国』を旅してまわったわけでもなく、〈卑彌呼ヒミコ〉と面会したわけでもないようなのだ。

つまり朝鮮半島の帯方郡タイホウから九州北端の伊都国イトまで来て、そこに逗留して、日本の役人——ひよつとしたら難升米シメら——と贈り物の交換をしたり交渉したり話を聞いたりしただけだったらしいのだ。

外国から倭国への使者が伊都国で接待されたり、文物を調べられたりしたことは、前章に記したとおり『魏志倭人伝』そのものに記されているが、さらに『魏志倭人伝』全体からも推測できる。

国々の間隔の記述が、朝鮮半島南端から九州北部までは距離の単位の「里」によってきちんと記されているの

に、そこをすぎると、あいまいな「日数」による表示になつてしまうのだ。

また、北九州からは遠い投馬国トウマや《邪馬台国》の風物・人物の記録も、北九州の伊都国などにくらべて、きわめてあいまいなのだ。

使者は北九州に留まっていたのだらうというこの推測に反論する学者もあり、その論拠は、印綬のような大切なものを伊都国で役人に渡して帰つてしまう筈はない——というものである。

しかし魏の使者が《邪馬台国》ヤマトイコクまで本当に来たのだとしたら、《卑彌呼》ヒミコや男弟や世話役の男の様子がもう少し書かれているのが自然だと思う。

もし《卑彌呼》が神秘性を保つために直接は会わなかったとしても、かわりに接待した人物のことや、建物のことや、建物周辺のことを書かれている筈ではないだろうか。

ところが、『魏志倭人伝』にはそれらのことは一行も書かれていないのだ。

《卑彌呼》の容貌も服装も体格も、身辺の男の様子も、建物の構造も、付近の風物も、何もない。

北九州の国々については、一般民衆の服装や食べ物や習慣がかなりくどくどと書かれているのに、肝心の《邪馬台国》の人間や風物の様子がまったく無く、あるのは抽象的なことばかりなのだ。

というわけで、魏の使者が《邪馬台国》まで来た可能性は微弱だし、仮に来ていたとしても《卑彌呼》や弟と直接会った可能性はほとんど無い——といえる。

ついでながら、《邪馬台国》に女王がいるという話自体も日本側は隠していて、シナ王朝には『魏志倭人伝』が書かれる少し前にやっと分かったのではないか——との説もある。

飛鳥時代アスカの推古天皇スイコのときも、聖徳太子ショウトクタイシや蘇我馬子ソガノウマコらが、天皇が女性であることをシナや朝鮮の使者に隠したらしいといわれている。

古代日本では女帝はごく普通の存在だったが、同時代のシナでは軽んぜられていて相手にされなかったからである。

以上のような次第で、魏からの——実質は帯方郡タイホウからの——使者の派遣が本当だったとしても、帰国して報告したのは、言葉のよく通じない相手から聞いたあいまい

な話にすぎなかったであろう。

とくに地理や政治や宗教や風俗習慣については、現在のわれわれでも、外国人に説明するのは難しい。むしろ誤解されることのほうが多い。

本国に戻って日本のことを正確に伝える旅行者のほうに、現代であっても珍しい。

だから、日本の役人が必死で説明したとしても、しくあいまいなことしか魏の都には伝わらず、誤解も多かったはずである。

さらに、梯^{テイシユン}儁^{チュウセイ}と張^{テウ}政^{セイ}は別の太守の子分であるため、見聞した事項を互いに照らしあって検討したとは、とても考えられない。

東洋史の岡田英弘はこのことを指摘したうえで、二人の使者の報告がずいぶん違っており、それを繋ぎ合わせたために、筋の通らない文章になったのだろう——と推理している。

これもありうることである。

◎難升米は漢文に通じていたか

つぎに〈ヘイ〉の史料について考えてみる。

倭国から魏^キへの使者として再三名前の出てくる難^ナ升^シ米^メが、魏^キや帯^{タイ}方^{ホウ}郡^{クン}の役人に話した内容が記録されていて、それを陳^{チン}壽^{ジュ}——または陳^{チン}壽^{ジュ}が参考にしたであろう『魏^キ略^{リョク}』その他の文献の著者——が見たり聞いたりした可能性があるだろう、ということが考えられる。

難升米なる名の人物がじつさいにいたのか、あるいは役職や一族をこういつていたのか、著者には判断できないが、『日本書紀』でいう田^タ道^{ダウ}間^{カン}守^{モリ} またはその一族のなかの誰かかもしれないという説が有力であることはすでに記した。

田^ス道^イ間^ニ守^ンは垂^ス仁^イ天^ニ皇^ンの命令で不死の妙薬である橘を求めて常世の国（たぶんシナ大陸）に渡ったが、帰国したときには天皇は崩御しており、悲観して死んでしまった。その墓は奈良市の垂^ス仁^イ天^ニ皇^ン陵の濠のなかにある。

この田^タ道^{ダウ}間^{カン}守^{モリ}は但^タ馬^マ地方を本拠地とした地方豪族の出身で、その豪族は古くから外交を仕事としていたらしい。

朝鮮の新羅^{シラギ}国の王子で日本に帰化した天^ア日^メ槍^{ノヒホコ}の曾孫とされているから、朝鮮やシナの言葉もある程度は理解し、漢字の素養があったのかもしれない。

〈卑彌呼〉の時代の半世紀後くらいの但馬地方の遺跡から、ごくさいきんになって、船の集団を描いた大きな板が発見されて評判になったが、それは、但馬地方の人たちが常時日本海を航海していたことを意味している。

古代の大和朝廷の政治形態は豪族（氏族）を単位としており、たとえば、物部氏一族が防衛庁、大伴氏一族が総務庁、忌部氏一族が文化庁、千家氏一族が島根県知事・・・といった具合になっていたから、外交は難升米や田道間守が属していたであろう但馬地方の豪族にまかせていた可能性が大いにある。

しかし、そうであっても、難升米がどれほどシナ語の会話や漢字漢文に通じていたかはわからないし、かりに通訳がいたとしても、どれほど正確に訳したのかはわからない。

もしそんなにシナ語や漢文に通じた人物が日本側にいたとしたら、そういう人たちは漢字漢文を得意になって書きまくったり喋りまくったりしていただろうし、そうだとしたら、古墳時代の遺跡にもうすこし漢字が残っていそうなものだが、銅鏡や剣などの輸入品やそのレプリカ以外で漢字の書かれた出土品が見つかるのは、〈卑彌

呼〉の時代よりかなり後の遺跡である。

漢字そのものは、〈卑彌呼〉もすでに見慣れていたであろうが、存在を知っていることと、それを普段から使うこととは、別である。

だから、かりに難升米が朝鮮からの帰化人の子孫だったとしても、漢文の素養がそんなに高かったとも思われず、魏の役人との間では、手振り身振りを加えて文章をやつと理解させる——という程度だったのではないかと思われる。

◎魏国や帯方郡の役人の意欲

それからもうひとつ、日本において、また魏国や帯方郡において、日本人と接した先方の役人の能力や意欲も問題である。

はるか遠方の野蛮国とされていた国の事柄をどこまで真面目に見聞したか疑問だし、その人間の話をどれほど真面目に記録したかも疑問なのだ。

それは、現在の北京政府や韓国や北朝鮮が、日本をほ

とんど理解しようとしていないことを考えれば、推理で
きる。

しかもその記録が陳壽チンジュや、陳壽が参考にしたかもしれない『魏略』を書いた魚豢ギョカンの耳目に入るまでには、ずい
ぶん又聞きや反復書写が有ったはずである。

いずれにせよ、『魏志倭人伝』とは、このようなしごく
あいまいな経緯で成立した短い文章であり、著者の陳壽
にとつては、長い史書の重要で無い部分の一部のまた一
部にすぎず、力を入れて書いたとはどうてい思えない記
述にすぎないのである。

著者も、読み下し文や現代語訳を読んでみて、とても
杜撰ズサンな印象をうける。

しかも、これがはじめて印刷されたのは十一世紀の宋
の時代だとされているので、陳壽が書いてから印刷され
るまでには七百年もの歳月があり、その間の転写回数は
相当なもので、写し間違いもかなり多いと想像される。

こういう成立の経緯を振り返ってみると、戦後の日本
で専門の学者からアマチュアコウズカの好事家までじつに多くの
人が議論してきた『魏志倭人伝』ギシワジンデンなる史書は、その記事
の出所がじつにあいまいで、信憑性シンビョウセイのないものだ、判

断せざるをえない。

陳壽にせよ、陳壽が参考にしたらしい魚豢にせよ、「蛮
族の話など正確に記録しようという熱意を持っていなか
ったであろう魏の使者や役人」が聞いたあいまいな話の、
「又聞きや書写」を元にして、首をひねりながら記録し
た——といったていどだったと思われる。

しかも、難升米らの語学力が十分ではなかったとし
たら、日本の役人と魏の役人との間には通訳がいたわけだ
が、その通訳がどれくらいの實力を持っていたかは、ま
ったくわからないのだ。

むしろ實力十分な通訳がいたほうがおかしいのだ。

そのうえ、とうじ日本列島の内部でさえ言葉がどの
いど通じたか、大いに疑問である。畿内人と九州人との
会話も大変だったであろう。いまでも東北の方言と九州
の方言とではほとんど通じない。

大陸・半島の内部でも方言問題があつたであろう。

だから、外交をつかさどつたらしい難升米にしても、
完全な対話ができたとは、とても考えられない。

身振り手振りを交えた会談だったであろう。

◎第四・一節の結論

伝言ゲームというゲームがあり、それは何人かで伝えてゆくうちに、何をいつているのか分からなくなってしまう事を面白がる遊びだが、そこまで酷くはなかったとしても、『魏志倭人伝』とは、

「熱意不明の使者が実力不明の通訳を介して聞いた記録の又聞きや書写という文献に、どれほどの信憑性があるのか？」

——という疑問を抱きながら読むべき史料だと思われるのだ。

四・二

地理的な信憑性

◎地理で考える「九州説」と「大和説」

『魏志倭人伝』で常に話題になり議論になるのは、女王
〔卑彌呼〕のいた《邪馬台国》とはいったいどのあたり
だったのか——ということである。

これが主として二説に分かれ、ひとつの説では「九州
のどこか」、もうひとつの説では「大和」となり、延々と
して議論が続いていることは、ご存じのとおりである。

この二説が出てしまうのは、不弥国から先が、
『記述そのままを信じると、ほとんどの国は九州の南端
から海に出てしまう』

——ということから来ている。

この矛盾を解決するために、

「A」「《邪馬台国》九州説」では、距離が今考えるよ
りもずっと短いのだ。

とするし、

「B」「《邪馬台国》大和説」では、方角の記述が不正
確であり南ではなく東だ。

——とするのがふつうである。

前節の著者の考えでは、『魏志倭人伝』にある《邪馬台
国》の位置の記述は、「とても信憑性がうすい」のだから、
文献だけから論理的にいえるのは、

「伊都国のすぐ近くではない」

——という程度のことなのだが、仮にあるていどの正
確さを、この記述が持っていたとして考えてみよう。

まず、伊都国にいたらしい《邪馬台国》の役人は、と
うぜん、《邪馬台国》と伊都国との間を往復していたにち
がいないから、距離について「歩いて何日くらい」とい
う数字を桁外れに間違えることはないだろうし、また太
陽を基準にして歩くので方角を九十度や百八十度も間違

えることは無いであろう。

で、このあとはさらなる仮定なのだが、この日本の役人——この役人がじつは難升米ナシメだったのかもしれないが——の話が、直接または通訳を介して魏キの人間にだいたいはそのまま伝わったとしよう。

そしてそれが帯方郡タイホウに伝言されたり役所で記録されたりして、さらに魏の都の洛陽ラクヨウにまで伝達されて記録され、さらに何回か書写されたものの、それほど大きな間違いもなく陳壽チンジュの耳や目に入ったとする。

で、その陳壽がふつうの神経の持ち主で、あるていどの学者だったとすれば——史書編纂をまかされるのだから当然そうだったのだが——書写係の下級役人のように何も考えずにそれをそのまま写し取るとは思えない。

倭国ワを含む東夷トウイとはだいたいどうなっているのか、地図を拡げて眺めるか、またはすくなくとも頭のなかに地図を思い浮かべるかしながら、記すにちがいない。

これは、倭国の中の国々の位置関係を記述するのだから、当たり前前の話である。

そこで、地図の問題についてすこし記してみることにしよう。

◎古代の日本列島

まず、現在のわれわれがよく知っている日本地図の外形に、昔の国内分割を描いてみる。

図4・1がそれである。

日本列島の外形は、ほぼ北を上にして、現在の地図と



図4・1 日本七道（八世紀）
と四道將軍派遣先

同じに描いてある。列島の内部の分割は、『記紀』の書かれた八世紀のもので、畿内を中心として、七つの「道」に分かれている。これを「日本七道」という。

奈良時代には東山道の北部から北海道以北にかけては蝦夷^{エミシ}だったが、平安初期には本州北端まで朝廷の勢力下にはいり、蝦夷は北海道以北のみとなった。また九州南部より南は朝廷の勢力下には入っていなかったらしい。

この分割は、もちろん今とは異なるが、しかしその境目は現在の地図にも継続しており、われわれにとって違和感はまったくくない。山陽・山陰・東海などは名前もそのままである。

じつはこの分割は、明治元年の地図でも同じであり、呼称も同じだった。日本がいかに歴史の断絶の少ない古い国であるかがわかる。

この地図に「大和」^{ヤマト}を中心として四つの矢印があるが、これは三世^{スジン}紀の崇神天皇時代の有名な四道^{シドウ}將軍の派遣先であり、後述する。

さらに、よく古い歴史に出てくる畿内部分の各国とその周辺とを、図4・2に示した。

畿内とは太線でかこまれた大和・和泉・河内・摂津・

山城の五つの国である。

大和は現在の奈良県であり、和泉・河内・摂津は現在の大阪府であり、山城は京都府の一部である。

この、畿内や七道の内部にある「国」も、ほとんどそのまま、いまの県になっており、和泉・河内・・・といった国名もいろいろな形でいまに残されていて、ここでも日本の歴史の継続性がよくわかる。

大和国は広いが、南部はほとんど山岳地帯であり、大和朝廷が栄えたのはこの北西部にある盆地の部分で、狭い意味での「大和」である。



図4・2 畿内とその周辺の国名
(八世紀)

図4・2には『記紀』でお馴染みの名前がたくさんあるが、古代においては、それぞれの国にそこを支配する豪族がおり、「国造」という大和朝廷の地方官としての地位を世襲で維持し、その地方の首長として、祭政を取り仕切っていた。

ただし大化改新以後は、近代化がすすんで、豪族単位の行政ではなくなり、国造は行政官的な役割を離れて、その地方の主要な神社の祭祀を司る世襲職となり、その一部の子孫は現在にまで続いている。出雲大社の千家宮司家、阿蘇神社の阿蘇宮司家、籠神社の海部宮司家などがそれである。

北部の丹波と丹後と但馬は、はじめは一体で丹波または但波と称されたが、但馬が西暦六八四年に分かれ、丹後は七一三年に分立している。ただし但馬という地域名は古くからあったらしい。

さて、日本列島というのは、図4・1のように南西から北東および真北にかけて伸びているが、〈卑彌呼〉の時代に比較的往来が多かったと思われる北九州から近畿にかけては、北九州を起点とすると、ほぼ東北東に向かっている。

そして西端の九州の北側と朝鮮半島の南端の間に壱岐

と対馬がある。

こういう日本地図の方位をもとにして『魏志倭人伝』の記事を当てはめて推理するときに出てくる、前記の「A」と「B」の意見、および他のユニークな意見による《邪馬台国》の想定位置を図示したのが、第一章の図1・1である。

見るとやはり、大和と九州に多くの意見が集中していることがわかる。

そのうち「大和説」における《邪馬台国》は、多少のずれはあっても、せまい意味での《大和》地方がほとんどである。

「九州説」については、距離の解釈によってじつにさまざまな種類があり、九州本島のあらゆる場所に広がっている。

◎『魏志倭人伝』の著者が見た地図とは？

「九州説」の学者は数多くいるが、そのなかで、とくにユニークかつ強烈な主張を展開しているのが、古田武彦

である。

氏の『魏志倭人伝』^{ギシワジンデン}についての著作は数多く出版されているので、ご存じの方も多いと思う。

この古田説によれば、『邪馬臺國』^{ヤマトイコク}は現存する写本のおりに『邪馬壹國』^{ヤマイコク}とすべきであり、それは九州の北部にあつたに違いないとして、畿内の『大和』と結びつける説に徹底反論している。

そして、九州王朝が、ひじょうに古くからあり、国歌の「君が代」も九州王朝を讃える歌だった——と力説している。

さらに氏の凄いのは、『魏志倭人伝』の国々の最後にある遠方の裸國や黒齒國を南米かもしれないとしていることで、南米に土器や遺伝子や寄生虫が古代九州の住民と似ている人たちがいることが、その証拠となるらしい。

南米に日本の九州の縄文人に似た人がいることは確かなようで、『卑彌呼』^{ヒミコ}の時代に太平洋を往復していた可能性も、可能性としてはもちろんあるが、同時に陸を渡った可能性も大きいし、第三の場所から日本と南米に分かれた可能性や偶然の一致の可能性もあるだろう。

いずれにせよ、「九州説」をとる人のほうが、「大和説」

の人よりも個性的でユニークな意見の持ち主が多いようである。

また、皇室に対する考え方が、「九州説」と「大和説」とで微妙に違っているようにも思える。

著者の表面的な印象かもしれないが、戦後の「九州説」論者はおしなべて皇室への愛情に乏しいように感じられるのだ。

さてここで、とても重要なことがある。

それは、『魏志倭人伝』^{ギシワジンデン}の著者陳壽^{チンジュ}やその前に史書『魏略』^{ギョカン}を書いた魚豢^{ギョカン}たちが、それを書くとき、どれくらい正確な地図を見ていたか、またはどのような地理を頭に描いていたか——ということである。

われわれは『魏志倭人伝』の、東へ何里とか南へ水行十日とかいう記述を読んでそれから『邪馬台国』の位置を考えると、無意識のうちに現在の日本地図を頭に描いている。

その地図はもちろん、図1・1や図3・1や図4・1のような正確なものである。

しかし、陳壽や魚豢らが現在ののような日本地図を見ていたとは、とても考えられない。

近世の日本でも、ほぼ正確な地図ができたのは幕末の

伊能忠敬以後のことである。

では、陳壽^{チンジュ}らはどのような地図を見ていたのであろうか？

これについても昔からいろいろな研究があり、とくに有名なのは、「大和説」をとる古代史家・肥後和男の依頼をうけて『魏志倭人伝』と古代地図の関係を検討した、地図学者の室賀信夫で、『神道学』という雑誌にまとめた考察を発表している。

図4・3は、室賀が指摘した古地図と、他の二つほどの古地図から、日本が描かれている周辺をおおまかに写したものである。

◎「古今華夷区域総要図」(a)について

これは十一世紀末にできたとされる地図で、日本などはたんに位置が示されているにすぎず、形状がわからないが、日本そのものがいくつもの国に分割されていることに気づく。

「倭奴^{ワノナ}」が朝鮮半島の南にあり、その南西に「日本」が

ある。倭奴国^{ワノナ}は、すでに述べたように、九州北端の国であり、日本の一部なのだが、それを独立した国と考えているのだ。

「倭奴」を独立国とすれば、十一世紀の日本の都は京都だから、「日本」とは京都あたりを中心とした国ということになる。

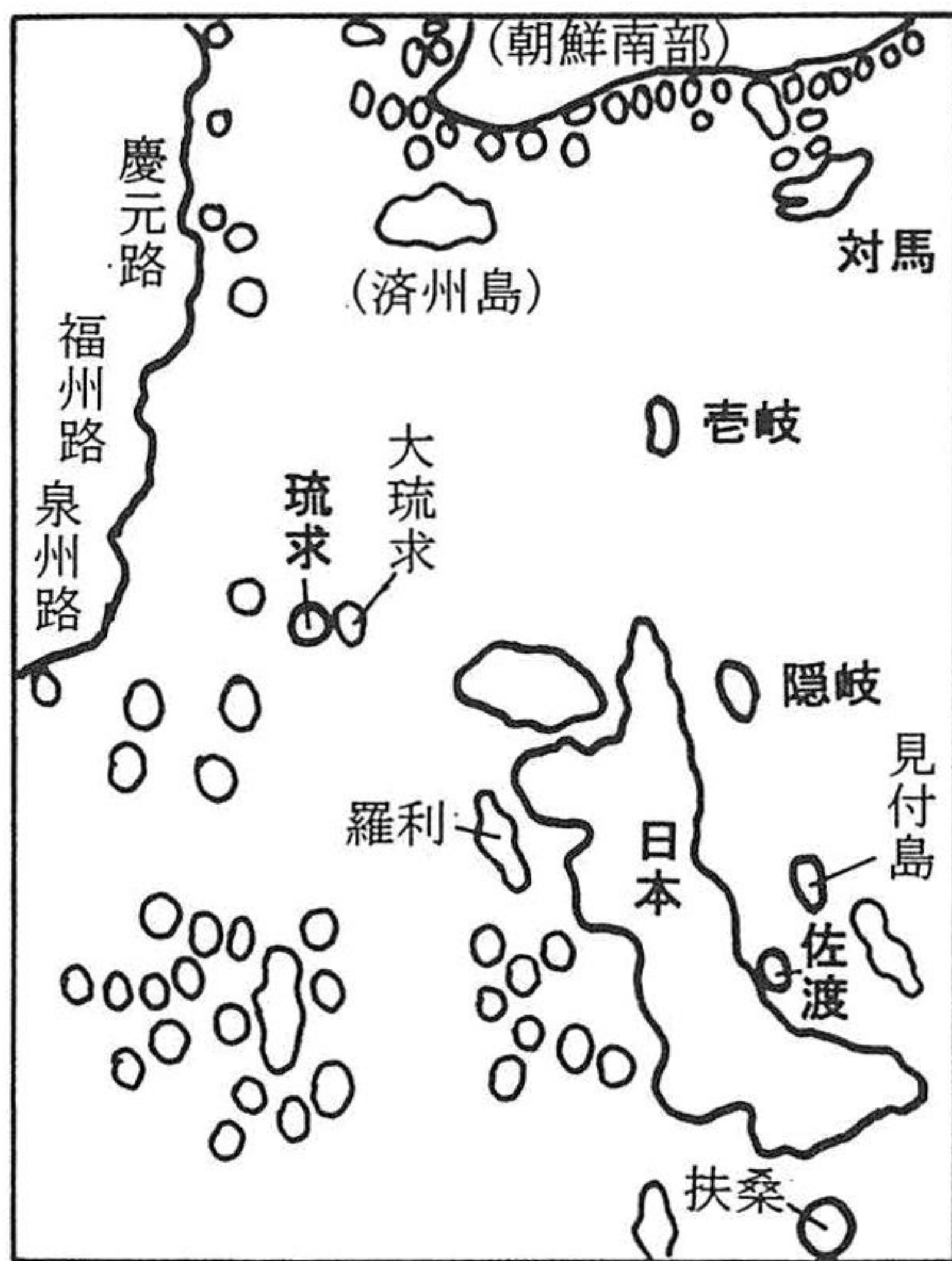
さらにその南西に「毛人^{モウジン}」という国があることになっている。毛人とは一般的には日本列島の蝦夷^{エミシ}のことらしいが、ここではたぶん関東の毛野^{ケノ}地方のことであり、それはまた『魏志倭人伝』にいう狗奴国^{クナ}のことだろうという人が多い。

毛野とは現在の群馬県と栃木県であるが、このあたりは元々は蝦夷の国々で、それが大和朝廷のかなり初期に朝廷の支配下に入ったとされている。

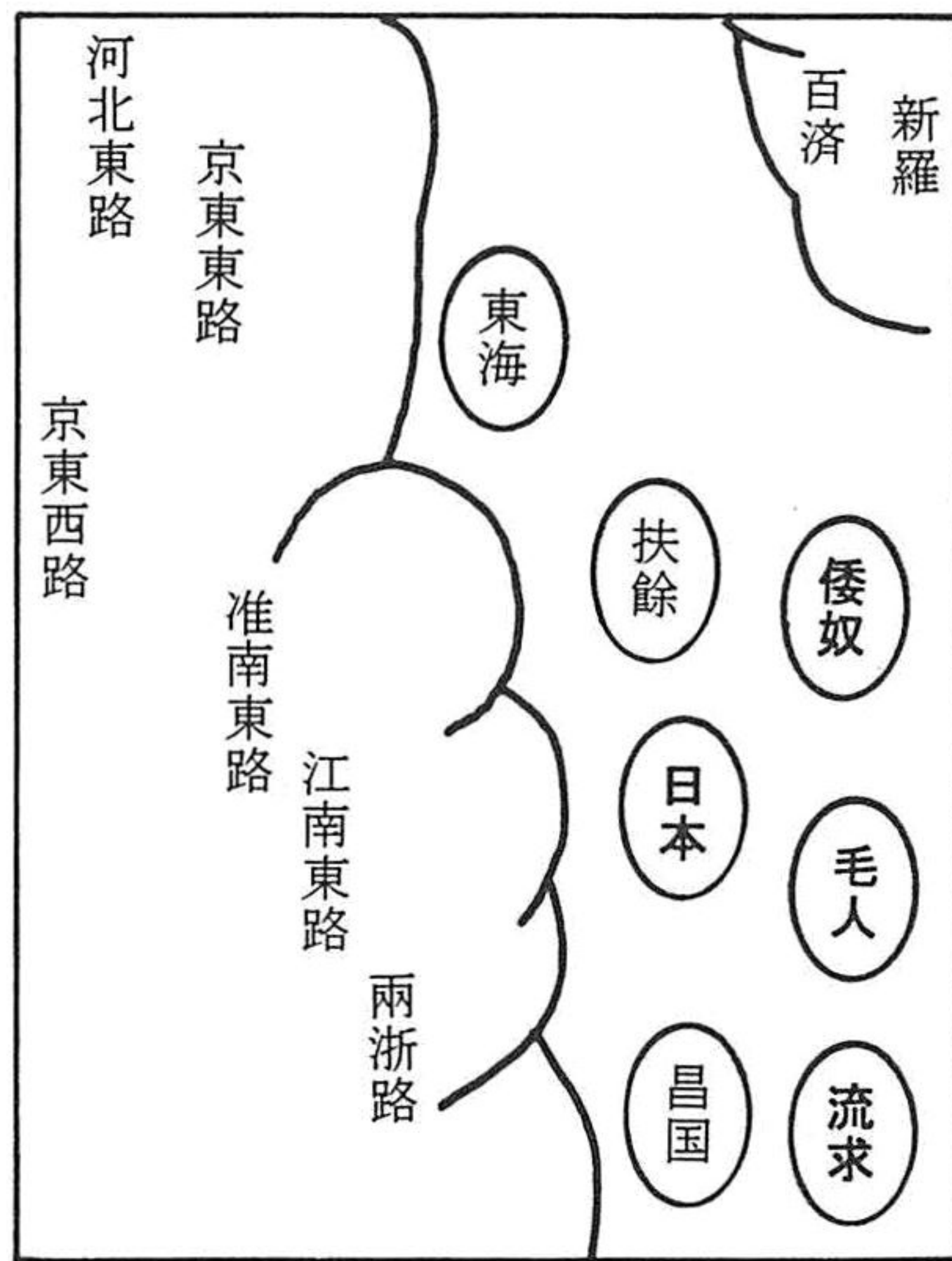
そしてその支配下におさめるさいの抗争が、『魏志倭人伝』にある、〈卑彌呼〉が苦勞したらしい狗奴国の王との軋轢^{アツレキ}だったのではないか、というわけである。

もちろんこれは一つの説にすぎない。

「毛人」のすぐ下に「流求^{リュウキュウ}」があるが、これは明らかに琉球^{リュウキウ}、すなわちいまの沖縄である。



(b) 混一疆理歴代国都之図
(15世紀初頭／部分)



(a) 古今華夷区域總要図
(11世紀末／部分)

図4・3 『魏志倭人伝』の執筆者
が見ていた地図の推理
(日本が見える部分の略写)



(c) 籌海図編
(15～16世紀ごろ／部分)

また地図からはみだしているが、元図では「流求」のすぐ下に「蝦夷^{エミシ}」がある。夷は地図では虫へんだが、同じであろう。

蝦夷とは、関東から東北、北海道にかけて、なかなか大和朝廷に服しなかった国々の総称で、時代が下がるにしたがって朝廷の領域との境界は北へ移動してゆき、北海道をさいごに消滅することはご存じのとおりである。

ここで面白いのは、これらの国々が、じっさいの日本列島においては南西から北東へと並んでいるのに、この（a）の地図では北から南へと並んでいることである。

北端の蝦夷が最南端にあるのだ。

そして国々の中心は、いまの沖縄県のあたりにある。まさに『魏志倭人伝^{ギシワジンデン}』にある「会稽東冶の東方海上^{カイケイトウヤ}」そのものである。

◎「混一疆理歴代国都之図^{コンイツキョウリレキダイコクトノズ}」（b）について

室賀信夫が肥後和男の依頼に応じて検討した結果のなかで発表した（b）は、『邪馬台国』大和説」を補強す

るものとして有名である。

この混一疆理歴代国都之図という古地図は、十五世紀初頭に朝鮮で作られたものだが、それは元の時代（十四世紀半ば）の二つの地図を合わせ、さらにそれに日本最古の列島地図とされる行基図を挿入したものだといわれている。

行基図^{ギョウキズ}とは、有名な僧・行基^{ギョウキ}（西暦六六八年～七四九年）が作ったと伝えられる地図で、原本は現存していないが、その言い伝えが信じられて、古い日本全図のことを総称して行基図というようになった。

じっさいに行基が描いた地図がどういうものであったかは不明だが、現存する最古の行基図は、鎌倉時代の末、西暦一三〇五年に書写されたとされ、形状からいえば、図（b）とほぼ同じである。

じっさいの日本列島は南西から北東にかけて延びているとどうじに弓状に曲がっているが、昔の日本人は東西に横たわっていると考えていたらしい。

したがって行基図も日本列島が東西に寝た形になっている。弓なりの曲がりをもつ図もあるが、その曲がりはおくわずかである。

この行基図をシナ地図に挿入するに際して、地図の作

者は、大きさを朝鮮半島よりずっと小さくし、位置を沖縄（図の琉求）よりさらに南にし、そして角度をほぼ九十度回転させたのだ。

弓なりの曲がりかなりある元図をつかったらしく、結果としては、真の日本列島を九十度回転したものに近くなっている。

なぜこのように九十度も回転させて、南の海に挿入したのかについて、室賀信夫は古い文献を検討し、古代からシナでは、

「日本は大陸の東の海中のかなり南方に、南北に伸びる形で存在しているという思いこみ」

——があり、それは『魏志倭人伝』などを読んでそう思ったのではなく、『魏志倭人伝』が書かれたころにはすでにそのような地理概念ができていたらしい——と推測したのである。

ちなみに、シナ王朝からみて日本は『魏志倭人伝』の記述どおり会稽の東方海上にあるという考えは、古くから日本にも知られていて、大学の名前や歌の文句になっている。東海大学の東海や「見よ東海の空あけて」という行進曲の東海がそれである。

朝鮮半島の南端から日本への行路は、対馬↓壱岐↓北九州とすべて南へすすむので、その先さらに南へ行けば日本の中心部に達すると思ったのであろう。

また五世紀前半のシナ史書『後漢書倭伝』^{ゴカンジョウワデン}には、日本列島は北西から南東にかけて長いと感じていたらしい文章があるが、だとすると（b）図が彼らの常識だった可能性がさらにたかまる。

◎「籌海図編」^{チユウカイズヘン}（c）について

これは一例として挙げたものにすぎないが、十六世紀ごろになっても、つまり信長や秀吉の時代になってもなお、このていどのレベルの地図がまじめに描かれていたのである。

この図（c）を見ると、図（b）のような日本列島への理解は、十七世紀——シナでは明から清の初期、日本では江戸前期——まで続いていたらしいことがわかる。

一部に室賀信夫の意見への反論も出されているが、国際日本文化研究センター教授で古代の歴史地図について

研究している千田稔は、室賀説やそれへの反論をさまざまな角度から検討して、室賀説が正しい可能性がたかいことを、ごくさいきんも『卑弥呼は大和に眠るか』のなかで述べている。

いずれにせよ、陳壽^{チンジュ}や魚豢^{ギョカン}が『魏志倭人伝^{ギシワジンデン}』を書いたとき念頭に浮かんでいたのは、げんざいのような日本地図ではなく、図4・3（b）のような地図の原形だった可能性がきわめて高いのである。

だとすると、

「《邪馬台国》大和説」

——ががぜん有利になってくる。

◎九十度ちがう地図の波紋

「大和説」を有利にみちびくひとつの仮説は、次のようなものである。

まず、《邪馬台国^{ヤマトイコク}》が《大和^{ヤマト}》だったと仮定する。

すると、伊都国^{イト}で魏の使者と会談した難升米^{ナシメ}ら日本の役人は、とうぜんながら《大和》と伊都国との間を何度

も往復していただろうから、その間の距離や方角はかなり正確に把握しており、東に何十日もいかねばならない——と述べたであろう。

それが魏の使者や記録者にどれほど正確に伝わったかはまったく不明だが、仮にあるていどは正しく伝わり、それがそれほどの変形を受けずに陳壽や魚豢に伝わったとしよう。

そうすると、その伝聞を元に史書を書こうとするとき、図4・3（b）しか知らない書き手は、頭を悩ますであろう。

図（b）で東へ船や徒歩で何十日も行くと、海へ出てしまい、さらに《邪馬台国》の近くにある何十もの国も、ぜんぶ海の中になってしまうからだ。

そこで、伝聞と書写で残されたその資料は方角を間違えたに違いないと考え、不弥国^{フミ}から先は、東ではなく南だろうと考え、南に変更して書いてしまうかもしれない。これは、前記の「B」の「《邪馬台国》大和説」をとっても合理的に説明するものである。

昔は大和から伊都国あたりまで——早飛脚は別にして一般の人は——三十日ほどかかったらしく、そういう記

述が日本の古い書物（延喜式など）に出ているそうである。

気象条件を見たり船頭の都合を見たり旅の疲れを癒したりしながら、進んだからであろう。

だから、北九州へ投馬国へ《邪馬台国》が水上三十日陸上一日という記述は、北九州から《大和》への日程とよく一致していることになるのだ。

また地図（b）の《邪馬台国》は沖縄よりずっと南方にあることになってしまいが、これは『魏志倭人伝』のなかの倭人の記述が妙に南方的であることと矛盾していない。

倭国の中心はかなり南方だからたぶんこうだろう——と陳壽らが考えたと推理できる。

さらにこの地図にもとづくと、狗奴国^{クナ}は九州南部の熊襲ではなく大和よりかなり東の三重県や愛知県から関東の群馬県・栃木県にかけてのどこかの豪族だろうということになり、これも『日本書紀』の四道將軍の伝説などと矛盾しない。

前述したように、狗奴国とは群馬県（上毛野）から栃木県（下毛野）にかけての「毛野」と呼ばれた地方の豪族ではなかったかとの説が唱えられている。

「狗奴」の魏国読みと「毛野」の大和読みがきわめて似ているというわけである。

また遺跡などからは、愛知県を中心とした東海地方ではないかとの説も有力になってきている。

一方（b）の地図で前記「A」の《邪馬台国》九州説をとることは、ほとんど不可能である。

「九州説」の場合には、陳壽らは地理は現在と同じ正確なものを知っており、ただ距離について間違えていたり現在の常識とはかけ離れた表示をしていたのだ、と——たぶんありえない——推理をしなければならぬ。

しかも距離は長さの単位の「里」だけではなく陸行何日、水行何日という時間を単位とした記述がたくさんあるので、これをうまく九州に当てはめて解釈するのは大変である。

そのため、水行二十日とは二十日に一度船が出たのだ——といった苦しい解釈まで飛び出している。

ところでこの古地図で面白いのは、朝鮮半島や大陸から見るとほぼ九十度のちがい——つまり東と南のちがい——があるが、対馬と壱岐^{ツシマ}を基準にして日本本土を見ると、けっこう正確なことである。

つまり朝鮮半島から見た対馬と壱岐の位置関係が違っているのであって、対馬から先の相対的位置関係はそれほど違ってはいないのだ。

図4・3(b)の対馬を正しい地図の対馬と一致させた上で壱岐を一致させようとすると、(b)全体を九十度ほど回転しなければならぬ。

そうすると、日本列島に関しては——大きさはまったく違っているが——列島の角度そのものは真実に近いものとなる。

したがって、朝鮮半島から見た壱岐の位置を間違えたために、日本列島の角度が九十度ずれてしまったようにもみえる。

もうひとつ、方角の九十度違いについての強力な論拠がある。

それは、北九州に到着してからの末廬国^{マツロ}→伊都国^{イト}→奴^ナ国の現実の方位は、図3・1で明確なように「北東」を向いているにもかかわらず、『魏志倭人伝』ではすべて「南東」と記されていることである。

つまり、どこにあるのかが明確になっているこの三国間の位置関係が、じつさいと記述とでちやうど九十度だけ違っているのだ。

これは否定しようのない完全な事実なので、その後の不弥国^{フミ}以降も、九十度違っているだろうと、かなりの妥当性をもって推理できるのである。

ちなみに奴国→不弥国は『魏志倭人伝』では東なので、九十度変更して北とすると、いくつかの候補地のうち図3・1の楢円の北側に小円で示した津屋岬^{ツヤサキ}(および福岡^{フクマ})が最有力となる。これも興味ぶかいことである。

このようなことから、陳壽らが見ていた地図は真実とは大きく異なり、仮に『邪馬台国』Ⅱ『大和』とすれば東と南の書き換えでなんとか説明がつくが、「九州説」ではとても苦しい——ということになる。

したがって地図の問題は「大和説」の人たちの大きな支えとなっている。

著者も、この地図の問題は重要だと考えている。

◎第四・二節の結論

しかしここでいいたいのは、『邪馬台国』大和説」の

推奨ではない。

そうではなくて、要するに、『魏志倭人伝』の編者の地理的知識はごくあいまいなものだったのではないかと疑う必要がある——ということをお願いするのである。

つまり『魏志倭人伝』^{ギンワジンデン}とは、日本列島が九十度も違って、しかもはるか南方にあるシナの古い地図からみても、

「不正確な地理的知識を元にして書かれた文献に、どれほどの信憑性があるのか？」

——という疑問を抱きながら読むべき史料だと思われるのだ。

四・三

シナ正史自体の信憑性^{シンビョウセイ}

さて次に、そもそもシナの正史における周辺国の記述がどれほど信憑性^{シンビョウセイ}のあるものなのか、それを探ってみることにしよう。

現代の中国の教科書にある自国以外の国についての記述——とくに日本や台湾についての記述——が強く偏向していることは、多くの人が指摘している。

中国の指導者たちには、隣国の歴史や社会を正確に調べて記述しようという意欲がほとんどなく、あるのは自国中心の中華思想とプロパガンダである。

そしてそれは今にはじまったことではなく、シナ王朝の歴史的伝統なのだ。

もちろんほとんどの国の歴史の教科書は、自国に有利

なことを中心にして書かれており、それは当然のことである。

自虐的なことを書いて生徒の気持ちを傷つけている日本の教科書は世界でも珍しいのだが、それはともかくとして、自国の誇りを中心に書くのがあたりまえの歴史教科書のなかでも、中国のそれは際だっているといわれる。

日本の古森義久や台湾の研究者たちは、現代中国の教科書を精密に研究して、それが徹底して一方的なプロパガンダで埋められ、真実を隠蔽していることを明らかにしている。

◎奇々怪々な『明史日本伝』

そういうシナの歴代権力者たちの習性からみて、古典だけ、あるいは『魏志倭人伝』^{ギシワジンデン}だけが正確で良心的に記されているとはとても思えない。

西尾幹二の『国民の歴史』では、『魏志倭人伝』の信憑性についての節で、岡田英弘『日本史の誕生』から次のシナ正史の一文を引用して、シナ王権の特質を抉っている。

この引用文は有名で、たとえば渡部昇一も著書のなかで言及している。

それは、光秀が信長を討ち、その光秀を秀吉が討った、「敵は本能寺にあり」という例の事件についての記述である。

江戸時代になって著された『明史日本伝』というシナの「正史」のなかに、それがあるのだ。

「日本にはもと王があつて、その臣下では関白というのが一番えらかった。当時、関白だったのは山城守の信長であつて、ある日、獵に出たところが木の下に寝ているやつがある。びっくりして飛び起きたところをつかまえて問いただすと、自分は平秀吉といって、薩摩の国の下男だという。すばしっこくて口がうまいので、信長に気に入られて馬飼いになり、木下という名をつけてもらった。

・・・信長の参謀の阿奇支というのが落ち度があつたので、信長は秀吉に命じて軍隊をひきいて攻めさせた。ところが突然、信長は家来の明智に殺された。秀吉はちょうど阿奇支を攻め

滅ぼしたばかりだったが、変事を聞いて武将の行長らとともに、勝つたいきおいで軍隊をひきいて帰り、明智をほろぼした」

もし信長、秀吉や本能寺についてまったく知らない人がこれを読んだら、当時の日本の歴史についてどう理解するだろうか？

秀吉の本拠地は九州の薩摩^{サツマ}なのか、それとも大阪城のある近畿なのか——と、議論するかもしれない。それから、阿奇支はシナの発音でアケチで、明智は日本の発音でアケチだから、ひよつとすると阿奇支と明智は同族だったのではないか、まさか兄弟ではないだろうが親戚かもしれない——などと議論するかもしれない。

こういう実例を見てしまうと、たとえば《邪馬臺國^{ヤマトイコク}》ではなく《邪馬壹國^{ヤマイコク}》だといった議論はほとんどナンセンスであるように思えてくる。

邪馬がヤマと読めれば、その次が臺だろうが壹だろうが、おなじでいどの重みでそれは大和だろうといえるし、同時にまた大和ではないだろう——ともいえてしまう。末廬^{マツロ}国にせよ伊都^{イト}国にせよ最初の読みのマツとかイトとかが現在に残る地名と合っていることが北九州地方と

するひとつの根拠だし、奴国^ナにいたっては、ナが一致しているだけである。「狗奴国^{クナ}Ⅱ九州熊襲^{クマシ}説」にしても、クが合っているだけである。

だから、〈卑彌呼^{ヒミコ}〉にしても、ヒやミコが合っていれば、それは『日本書紀』のだれそれだろう——といえるし、またそうではない——ともいえるであろう。

ここでくどいようだが、このていどのレベルの史書を元に詳細な議論をするナンセンスさを、もう一つのたとえで書いてみよう。

もしローマ字での史料の断片しか分からず、真面目に検討しようという意欲のない未来の歴史家が、明治維新前後の日本の首都の名前について書いたとすると、次のようになるかもしれないのだ。

「・・・T O K Y O という都市名は昔はK Y O T O といっていたらしい。それを明治維新という革命があったので名前を変える必要が生じ、K Y O とT O を逆転させてT O K Y O としたのだろう。しかしそれに異議を唱えて、後々までしつこくK Y O T O と呼ぶ人間がいたらしい・・・」

これは笑い話だが、『魏志倭人伝』にはそういう側面があることを承知していなければならぬ。

だから、樋口清之、渡部昇一、西尾幹二、岡田英弘といった論客たちが、「B級資料にすぎない」と喝破して、一字一句を問題にする愚を指摘しているのだ。

◎対日蔑視と誇大数字

明智光秀の本能寺の事件をデタラメに書いた興味ぶかい『明史日本伝』は、くりかえすが、江戸時代に書かれたシナの「正史」である。

要するに、シナの伝統的な正史とは、江戸時代になってもこの程度のものにすぎなかったのだ。

秀吉の時代には、日本と明国との交流は有りすぎるほど有ったのだから、もし正史の編者が本気になって調べようとしたら、もっとずっと正確な記述になっていたであろう。

しかし本気にはなっていなかった。シナの役人の周辺国への態度は、大昔からこんなものであった。

だから『魏志倭人伝』の信憑性も——明史より千五百

年も前のものだから——良くてこのレベルだ、と考えなければならぬ。

また、『魏志倭人伝』が『東夷伝』のなかにあることから分かるように、昔からシナ王朝では、周囲の国々を、「東夷」「西戎」「南蛮」「北狄」と呼んでいた。すべて野蛮な国という侮蔑した意味である。

つまり人間なみには考えておらず、良くて貢ぎ物を持つてくる蛮族といった扱いでしかなかった。

ODAという名の大金を貢ぐ現在の日本も、北京政府から見ればその程度のものにすぎないが、昔はなおのことであったのだ。

《邪馬台国》の「邪」にしても《卑彌呼》の「卑」にしても、また倭国、倭人の「倭」にしても、当てはめられている漢字は下品な意味のものばかりである。

差別意識を持っていなかったら、もっと上品な文字をあてはめていたであろう。

そういうわけなので、『魏志倭人伝』の信憑性を客観的に論証するためには、「東夷」のなかの日本以外の国々や、「東夷」以外の外国についてどう書かれているかを見て、それらが事実とどのくらい違っているかを検証する必要

がある。

それは著者の力の及ばないところであるが、歴史資料として批判に耐えるようなものであるかどうかは疑わしい。

ざっと読んでみても、「女人国」や「顔が二つある人間の国」が東の海（つまり日本の本州の方角）にある——などという記述がいきなり出てくるのだ。

『魏志倭人伝』そのものに戻って、そのあやふやさは、『明史日本伝』を読まなくても、それ自体だけからでもわかる。

たとえば、樋口清之が指摘していることだが、《卑彌呼》の墓をつくったとき、奴婢百余人が殉葬されたとあるが、三世紀の墓の発掘調査からはそういう殉葬がなされた証拠は見つかっていない。

また死者を葬るのに棺はつくるが、それを入れる施設（槨）はつくらず直接地中に埋める——とあるが、地位の高い人の墓には、弥生時代であってもちゃんと槨があった事も、遺跡からわかっている。

しかもシナ大陸や朝鮮半島にも例のない、石と木の二重の槨さえ発見されているのだ。

牛や馬がいなかったという話も、骨の発掘からきわめ

て疑問であるし、百まで生きるというのも信じがたい。衣服などについても、南方でしかありえないような、いかげんな話である。

もうひとつ信じにくい数字に、戸数がある。

投馬^{トウマ}国が五万余戸、《邪馬台国^{ヤマトイコク}》が七万余戸などとなっており、数値のあるすべての国を合わせると十五万戸ほどである。

一戸あたりの人数は、奈良時代について概算されており、平均二十二人ほどだったといわれている。

《卑彌呼^{ヒミコ}》の時代はもっと多かったと推理されるが、かにこの二十二を戸数にかけると、主要な国々の人口の合計は、三百万以上ということになる。

しかし、奈良時代になっても、『魏志倭人伝』に書かれた地域の人口は、——沢田吾一らの研究から——ただか数百万であろうと推理される。

奈良時代より五百年ほど前の《卑彌呼》の時代には、これよりはるかに少なかったであろう。

つまり、計算があわないのだ。

このように、シナ王朝がつくる日本についての記事は、間違いが多く、あいまいで、かつ下品なのだ。

◎第四・三節の結論

以上のようなわけで、『魏志倭人伝^{ギシワジンデン}』とは、江戸時代に書かれたシナ正史の凄い中身から推察しても、また倭人伝そのものを考古学で検証してみても、

「周辺国については伝統的に侮蔑的で間違いの多い正史を書くシナの古い史書中のごく短い文献に、どれほどの信憑性があるのか？」

——という疑問を抱きながら読むべき史料だと思われるのだ。